

ISSN 0910-2396

野鳥たより

—北海道—

第 117 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成11年9月21日



1999. 4. 7 円山 撮影者 田向一彦

〒003-0024 札幌市白石区本郷通8丁目南1-21



も く じ

厚岸水鳥観察館専門員 澁谷 辰生	2
クロツラヘラサギ観察記 山田 良造	5
北海道におけるツバメチドリの記録	6
このごろの夏 飯嶋 良朗	7
探鳥会ほうこく	7
探鳥会案内	12
鳥民だより	12

厚岸湖・別寒辺牛湿原のカモ類

厚岸水鳥観察館専門員 澁谷 辰 生

道東の湿原というと、まず1番に名前が出てくるのは釧路湿原、次に霧多布湿原、そして風蓮湖という名前が出てくるのではないのでしょうか？ たぶん厚岸町の別寒辺牛湿原は、道東の湿地群の中でも一番知名度が低い場所の一つではないかと思えます。

しかし、水辺の鳥を取り上げただけでも、冬に渡来する海ワシ類の数は、多い年で200~300羽以上、オオハクチョウの越冬数は餌付け無しで2,000~3,000羽、通過するものは約1万羽以上。これらオオハクチョウも含めてカモ類は約20種。その数は千~万の単位。今までなぜ水鳥飛来地として有名になっていなかったのか不思議でなりません。

そこで今回は、私が厚岸町に来て5年間で確認した、厚岸水鳥観察館周辺にやってくるカモ類を紹介いたします。

水鳥観察館周辺は別寒辺牛川の河口にあたる部分にあり、川の出口は厚岸湖になっています。河口周辺には湿原が非常に複雑に入り組んで水路がたくさん発達しており、カモ類にとって身を隠すスペースがたくさんあります。また、厚岸湖は海とつながっている汽水湖なので、時間帯によっては汽水域の干潟も出現するちょっと変わった環境になっております。もちろん水草、そしてアイサ類にとっては魚類も豊富に存在し、餌条件は申し分ありません。

さてカモ類を、渡り・越冬・繁殖で分けると、一番多いのは表のように<渡り・越冬>組です。種類によって大きく2グループに分かれまして、まず最初に表の3~12番の淡水ガモが9月~10月に第1陣としてやって来ます。マガモが少し早めに、オナガガモ・ヒドリガモ・

ハシビロガモ・コガモが少し遅れてやってくるという感じでしょうか。その隙間に、カルガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、まれにシマアジなどが入り込んでいるような感じです。

この時期の淡水ガモの特徴なのですが、一見無意味に思える頻繁な飛行、着水が見られます。飛び立つ単位は、異種も混じり合っている数十~百羽前後ですが、飛び立つと同時に周辺の複数のグループもつられて飛び立つのでその景色は圧巻です。ちょうどムクドリの子が町中を飛んでいる様子を思い浮かべていただければよいでしょうか。これがカモで起こるのです。

そして約1ヶ月遅れて13番以降の潜水ガモ（海ガモを除く）が渡ってきます。こちらは、淡水ガモが空を乱舞するのは対照的に、水上で編隊を組んで交互に潜水する姿が見られます。

当然ですが、この時期ですと全てがエクリプスですので慣れないと同定は難しいと思いますが、エクリプスマニアな方は見て飽きないと思います。

これらカモが出揃うと、コガモやハシビロガモなど通過するだけの種類を除いて12月中旬までダラダラとその数が増えていきます。そして別寒辺牛川が凍り始めるのもこの月。氷が張り始めると途端に元気が良くなるのがアイサ類。カワアイサは年中見られますが、ミコアイサも数十羽の単位で見られるようになります。またウミアイサも少数が河川に入り込んできます。

さて、ここまで書いて1種類だけ説明していない大型カモ類があります。それはオオハクチョウです。最初に数を示したとおり、実は厚岸湖~別寒辺牛川河口はオオハクチョウの国内でも有数な中継地・越冬地なのです。



(ちなみに、厚岸湖は十分な水草が自生しているため餌付けは行っておりません)

オオハクチョウは、10月の初め～中旬頃に第1陣がやってきて12月の中旬頃に渡りのピークを迎えます。その数は、瞬間的に数えて4,000～6,000羽ほど。もちろんこれは短時間に目の前にいるものだけを数えていますので、実際は数えている最中にも飛来してくるもの、そして南下していくものがありますし、さらにそれが何日も続くので、実際の飛来数はもっと多いと推定できます。それらを大雑把に推定すると、約1万羽以上が通過しているようです。これは根室の風連湖が同じオオハクチョウの中継地になっており、厚岸より少し早く1万羽になっていることを考えると、シベリアから渡ってきたオオハクチョウは、風連湖～厚岸湖のラインを大部分が通過しているのかな？と想像できます。実はこのあたりのオオハクチョウの動きはよくわかっておりませんが、今後の地域間での調査の連携が必要になってくる部分でもあります。

12月にピークを迎えたオオハクチョウは1月になると一気に減少し2,000～3,000羽程度になります。それは、別寒辺牛川がほぼ結氷し、厚岸湖も海の近くを残して結氷すると同時に、越冬個体を残してほとんどが南下してしまうからです。これはオオハクチョウに限らず、他のカモ類も同様に減少します。ただし、氷で一気になくなった水面に越冬個体が集中するので、見た目は多くなっ

カモ類は10月～12月までは主にこのあたりに集中する。
潮の満ち引きによって、厚岸湖内に出たり戻ってきたりする。

河川や厚岸湖東部が氷結すると、水面を求めて市街地周辺に集まってくる。

厚岸湖

たような気がします。

この状態が3月初めくらいまで続きます。迷鳥ガモも希に出てきまして、今年はオオホシハジロが最大12羽、結局春まで滞在していました。その他ヒメハジロが12月頃観察されることがあります。

3月後半～4月は、今度は北上の季節に入ります。氷が解け始めると再びしばらくはアイサの天国になり、河川内の水が流れてしまうと、他のカモが侵入してきます。減少したオオハクチョウも再び増え始め、だいたい4月一杯でほとんどが飛去してしまいます。他のカモ類は少し遅れて5月一杯で姿を消します。

さて、この原稿を書いているのは7月。今はどんなカモがいるかという・・・マガモ、マガモ、どこを見てもマガモ。希にヒナ連れのカワアイサ。カヌーで川を下っていると、ホントに希にオシドリが出てくる。とっても寂しいのです。タンチョウやアオサギはいるけど、北海道は典型的な夏型観光の地域。一番水鳥が少ない時期にはお客様は多くて、一番水鳥が多い時期にお客さんは少ないのです。何とか冬の厚岸の姿を見てもらいたいのですが、道東は辺境の地、なかなか皆さんやって来てくれません。さて、この原稿を見た人は来てくれないかなあ。

☎088-1136 厚岸町大字太田村字大別2番3

URL: <http://www.marimo.or.jp/>
AWOC/

表 厚岸水鳥観察館周辺で確認できるカモ類

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	分類		
1	オオハクチョウ	■												C		
2	オシドリ	■													A	
3	マガモ	■													D	
4	カルガモ	■				■									B	
5	コガモ	■			■										B	
6	ヨシガモ	■											■		C	
7	オカヨシガモ	少数								少数						B
8	ヒドリガモ	■		■										C		
9	アメリカヒドリ	ごく希								ごく希						B
10	オナガガモ	■		■										C		
11	シマアジ								少数						B	
12	ハシビロガモ	■			■										C	
13	ホシハジロ	■				■										C
14	オオホシハジロ									1999年は最大12羽		■			E	
15	キンクロハジロ	■				■										C
16	スズガモ	■				■										C
17	ホオジロガモ	■			■										C	
18	ヒメハジロ	1羽程度が12月に見られることが多い											■		B	
19	ミコアイサ	■			■										C	
20	ウミアイサ	■			■										C	
21	カワアイサ	■													D	

分類 A:繁殖 B:渡り C:渡り・越冬 D:繁殖・渡り・越冬 E:その他

愛護会会員増にご協力を

北海道野鳥愛護会ではただいま会員10%増計画に取り組んでいます。

愛護会の運営は皆様からの会費によって支えられていますが、決して余裕のある状況ではありません。また、将来計画の一つとして、「野鳥だより」を現在のB5版から、一回り大きいA4版にし、文字サイズも大きくして読みやすくしたいというものもありますが、それに伴う印刷費・郵送費の出費増を考えると、会員を現在の約360個人・家族（個人会員330名、家族会員33家族）から400個人・家族への増加が必要となります。

愛護会が将来ともに健全に維持され、また発展していくため、皆様のお知りあいにお声をかけ、一人でも多く会員になっていただくことに是非ともご協力下さい。

「野鳥だより」 バックナンバーを求めています

「野鳥だより」は今号で第117号になりました。適当な時期に創刊号から何冊かずつまとめて製本し、保存版として残す計画です。第36号（昭和53年、1978年）からはそれぞれ複数冊ずつ残されていて大丈夫なのですが、創刊号から第35号までは1冊ずつしかなく、将来の保存に不安なところがあります。もし会員の皆様の中に創刊号から第35号まで（通しでなくても構いません）をお持ちで、愛護会に寄贈されてもいいという方がおられましたら下記までご連絡下さい。

広報代表 樋口孝城

☎ 011-771-4470

クロツラヘラサギ観察記

山田良造

朝鮮半島の西南離島（蝸島、父島等）、中国東北地区の一部で繁殖し、九州などでは少数が毎年観察されるが、北海道ではめったに見られないクロツラヘラサギを江別市角山の排泥池で観察したその記録です。

1999年7月3日午前10時30分頃、私は江別市角山石狩川沿いの排泥池で野鳥を観察していた。排泥池は浚渫した泥を入れるポケットとして北海道開発局が造成したものであるが、浚渫工事終了から数年経過した現在、植物が繁殖し、一部ヨシ原化しチュウヒの繁殖地となっている。しかし、今年はチュウヒの繁殖を確認していない。湿地化した排泥池水辺にはミズアオイの群落があったが、今年は水抜き排水溝が掘られ、この植物は見られなかった。堤防は赤紫色のムラサキツメクサや、黄色のタンポポモドキなどで花盛りだった。

新石狩大橋寄りの排泥池には水が残っていて、この水辺にはマガモ数羽とオシドリ数羽が休息していた。この群れの中に白色の水鳥が入っていた。約150m先のこの鳥には冠羽があり、嘴がへら状、しかも嘴全体から目先まで幅広く黒いことに気づき、クロツラヘラサギだと思った。

「1枚の写真は数枚の原稿に勝る」と言われていることから、まず記録写真と思い、急いで撮った。しかし距離は遠い。2枚目の写真を撮ったとき、マガモの群れが隣の石狩川寄り排泥池に飛び移った。この地域は狩猟禁止区域ではないので、マガモでも警戒心強く、人の気配で飛ぶ。もちろんクロツラヘラサギもマガモと一緒に隣の排泥池に飛び移ってしまった。排泥池には水もれを防ぐため、ビニールで覆われた土手があり、この土手のかげになって、水面はもちろん、クロツラヘラサギの姿も見えない。

クロツラヘラサギはヘラサギに似ていることから、念のためもう少し観察して識別を確かなものにしようと思い、車から降りてそろりそろりクロツラヘラサギが降りた排泥池に近づいた。しかし、警戒心の強いマガモの群れは100m先で一斉に飛び上がった。この群れの中に真白なクロツラヘラサギがひととき目立って見えた。群れは石狩川に出て下流をめざしたが、すぐに転回し上流に向かった。やがて、対岸の江別市八幡方向に豆粒のように小さくなり見えなくなってしまった。

トキ科のクロツラヘラサギは、全長73.5cm、ヘラサギに似ているが少し小さく、嘴の根元から目にかけて皮膚

が裸出し黒い。体は白色であるが、夏羽では頸の下が橙黄色帯びている。今回見たクロツラヘラサギは冠羽と頸の下の橙黄色の帯があり、夏羽成鳥と思われた。

日本には九州、本州などに冬鳥として飛来するが、北海道での記録としては1984年8月にコムケ湖、1987年3月30日から4月7日まで上ノ国町大安住川と天の川、1992年6月と8月にウトナイ湖となっており、冬の記録はない。ウトナイ湖では私が江別市角山で観察した少し前の6月20日に、その日に行われた日本野鳥の会バードソンに参加した1チームによって観察されたという。その個体はもしかしたら私が見たものと同一の個体かもしれないが、6月20日から7月3日まで、どこかで観察されたという話は聞かず、想像にまかせるしかない。

☎003-0021 札幌市白石区栄通16丁目4-13

<参考文献>

日本産鳥類図鑑（東海大学出版会）、この鳥を守ろう（霞会館）、ワイルドライフ・レポートNo.4（野生生物情報センター）、北海道野鳥だより72号（北海道野鳥愛護会）等参照。ウトナイ湖の記録は日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリの協力による。



クロツラヘラサギ 1999. 7. 3
江別市角山 石狩川沿い
撮影 山田 良造

北海道におけるツバメチドリの記録

今年（1999年）5月9日にツバメチドリが余市町栄町（大浜町）の海岸に飛来した。日本野鳥の会小樽支部の山田忠重さんが写真撮影し（写真参照）、5月15日の北海道新聞（小樽・後志版）に掲載された。後志支庁管内ではこれがツバメチドリの初記録と思われる。ツバメチドリの記録は北海道全域をみても少なく、これを機会に何らかの形で公表されたものを知りうる範囲で集めてみたが20例に満たない。それらについて年代順に紹介してみよう。

- 1973年9月17日 網走・濤沸湖（城殿、鳥26、1977）
1975年8月 根室・春国岱（高田、ワイルドライフ・レポート No.12、1991）
1976年8月 根室・春国岱（高田、ワイルドライフ・レポート No.12、1991）
1978年4月23日 十勝・大樹町生花（日本野鳥の会十勝支部・釧路支部、十勝と釧路の野鳥、1987）
1983年7月 胆振・ウトナイ湖（日本野鳥の会、ウトナイ湖サンクチュアリ年次報告書、1991）
1985年8月17日～9月9日 胆振・鶴川（羽田、野鳥だより63、1986）
1987年4月27日 石狩・石狩生振（田中、野鳥だより68、1987）
1987年9月4日 留萌・天売島（寺沢、おろろんー天売島の詩ー巻末リスト、1993）
1991年4月29日 十勝・浦幌（佐藤、ワイルドライフ・レポート No.16、1995）
1994年7月2日 十勝・浦幌（佐藤、ワイルドライフ・レポート No.16、1995）
1995年8月27日 胆振・鶴川（北海道野鳥愛護会、野鳥だより106、探鳥会報告、1995）
1998年5月17日 胆振・鶴川（北海道野鳥愛護会、野鳥だより113、探鳥会報告、1998）
1998年7月2日 石狩・石狩生振（石狩鳥類研究会、石狩鳥報1998、1999）

以上が観察年月や場所が明確なものであるが、これら以外に利尻島で1966年～1997年1月までに記録された鳥のリスト（利尻島自然情報センター、利尻島の野鳥リスト、1997）では年は不明であるが4月に記録があることになっている。また原典にはあたっていないが、胆振の勇払原野（石城、勇払原野一帯の鳥類相、北大農学部演習林研究所報告、1987）での記録も見られる。さらにウ

トナイ湖では1989年にも記録はあるが（日本野鳥の会、ウトナイ湖サンクチュアリ年次報告書、1991）、観察月日は不明である。

公表されたのを見る限りにおいては、これまでのツバメチドリの記録は胆振、十勝、根室、網走、石狩の5支庁、および利尻島（宗谷支庁）と天売島（留萌支庁）だけであり、道南、島嶼を除く道北、空知・上川の内陸部からの記録は見当らない。今回新しく余市（後志）の記録が加わったが、やはり北海道では稀にしか観察されない鳥の一つであろう。

観察月を見ると4月と5月、そして7～9月になっており、6月および10月～3月の記録はない。ツバメチドリはかつては日本では迷鳥または旅鳥といわれていたが、最近では本州中部以南での繁殖の記録が多い。北海道での繁殖記録はなく、出現頻度および出現時期を考慮すると北海道では「稀な旅鳥」として扱うのが妥当であろう。

先に紹介したもの以外にも公表されているものがあるかもしれない。また個人記録として公表されないままのものもあると思われ、実際にはもっと多くの飛来があるものと考えられる。未発表ではあるが、今年1999年7月4日に江別市角山の石狩川で2羽が観察されたとの報も愛護会会員から届けられている。将来的には観察記録がもっと蓄積することにより、北海道へのツバメチドリの飛来状況がより明確になるであろう。

文責 広報部



ツバメチドリ 1999. 5. 9
余市町栄町（東大浜中）
撮影 山田 忠重

このごろの夏

飯 嶋 良 朗

私は獣医である。農業共済組合に勤務している。診療車に診療道具、薬剤をつめこみ、毎日牧場に往診する。助手席には、聴診器や診療簿のほかには双眼鏡が常備されている。無論、この双眼鏡は診療に供されるものではない。

私の住む十勝は酪農のさかんな所で、牧草地が多く、したがって草原性の鳥の数も種類も非常に多い。初夏の朝など、早目に往診依頼をされると、目的の牧場に着くまでにちょとしたバードウォッチングが完了することになる。まず、ノビタキが無数にとび出してくる（ちょっと大げさかな）。アオジやヒバリがやかましい。カッコウの音が遠くから響いてくる。シマアオジはハデな姿を誇るかのように胸をはり美声を放つ。ハデと言えば、ノゴマの喉はどうだ。尾をピンとあげいさましくさえずる。数えていくとキリがない。とにかく、鳥の声と姿があふれていた。しかし、最近では、どうも夏が静かだ。アオジだけは勢いがいいが、ノビタキは遠慮がちであり、ノゴマは時おり姿を見せるだけだ。シマアオジに至っては、十勝はもう見限られたかのようで、ここ数年、私は彼らに会ったことがない。山に入っても同様だ。何となく静かなのだ。夏鳥は、どうも、少なくなってきたよう

だ。私は、大樹町に長く住んでいたもので、1986年にそれまでの記録をまとめて「大樹の鳥」という鳥類目録を自費出版した。そして、今年のはじめに、その改訂版を再び出版した。初版の時からすでに気がついてはいたのだが、改訂版のために記録を整理してはいたのだが、夏鳥の記録が極端に少なくなってきたのだ。私の記録は

正式なセンサスによるものではなく、目についたものを随時ひかえておいただけのものだ。客観的に比較検討の資料にはならないが、それでも、大概是把握できる。夏鳥は、明らかに、少なくなっている。すなわち、1986年の少し前から徐々に、そして最近では急激に、夏鳥はその渡来数を減少させている。

私は博愛な精神の自然愛護主義者ではないが、自然相手の遊びが好きだ。私が夢みるのは、昔のように、どこへ行っても鳥獣が見られ、いたる所の水場で魚がすぐえ野生のクリ、カキ、ブドウ、アケビなどがいくらかでも手に入る。そして、狩と漁を主体とした自給自足生活を営む。このような世界だ。こうしてのんびりとくらせたら、どんなに愉快だろうと思う。しかし、世界中の人口は60億人となり、地球の許容量100億人に至るのも間近という状態だ。人口が増えてきたのとは逆に、野生動物は数を減らしており、中には絶滅に瀕している種も多くある。狩や漁を主体とした自給自足生活など望むべくもない。地球には、われわれ人間に、このような生活をさせる余裕はないのだ。しかし、環境さえ整備しておけば、鳥獣は山野に、魚は水場に、以前のようにあふれかえるとまではいかなくとも、数多く見られるようにはなるだろう。ただし、この環境の整備というやつがやっかいだ。むづかしい。どうしたらよいかは分かっているのに、絡んでくる問題が多くて、この作業がなかなか進められない。このままだと、夏はどんどん静かになっていくことだろう。そんな夏はつまらないねえ。願ひ下げだ。

〒080-0838 帯広市大空町7丁目



宮島沼 探鳥会所感

1999. 4. 18

松原 寛直

4月18日、宮島沼の探鳥会に参加させていただきました。天候は快晴、絶好の探鳥会日和でしたが…。幹事の方々のお話では、ここでも近年まれに見る大雪に見舞われ、沼の大半が結氷しており、メインのマガンも少数を数えるのみ…。例年の同時期より鳥の種類も少なく？来

週末になれば、30数種は見られるとの事でした。早く氷が解け、数多く鳥達の姿が見られる日の来るのを楽しみに待ちたいと思います。私もこれ迄、何度か愛護会の探鳥会に参加させていただきましたが、幹事の方々が皆様色々と懇切丁寧にご教授、ご指導して下さい、感謝の念で一杯です。過日の愛護会探鳥会で幹事の方が「今日は俗世間の肩書きや地位やしがらみを脱ぎ捨て、野鳥が好きで、鳥を愛する心を持った人々の集まりであり、この一点で終日楽しく過ごしましょう」とおっしゃいました。本当に含蓄のある言葉であり、普段、俗世間の泥水にどっぷり浸っている私にとっては、本当に深く感銘いたしました。今後ともよろしく願い申し上げます。

最後に、この会の益々の発展と会員皆様のご健康をご祈念し、拙文の筆を置きます。

〒069-0825 江別市野幌東町5の13

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、ヒドリガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、シロカモメ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス

以上 21種

〔参加者〕北山政人、山田良造、井川修二、佐藤 勇、速藤尹希子、後藤義民、浪田良三・典子、長谷川稔、東尚美、川上季幸、戸津高保・以知子、山田美子、樋口孝城・陽子、村田静穂、勝俣征也・由美子、松原寛直、関口健一、小堀煌治、板田孝弘、佐藤幸典、永島良郎・トキ江

以上 26名

〔担当幹事〕佐藤幸典、永島良郎

野幌森林公園探鳥会に参加して

1999. 5. 2 沢田 敦子

夫婦でバードウォッチングを始めて、二年余りになります。「日本野鳥の会」には入会しておりますが、まだ初心者で、夏鳥を見る機会がありませんでした。

昨年7月に東京より移転してから、探鳥会も遠ざかっていましたが、久しぶりに参加した会で「野鳥愛護会」の存在を知りました。会の方から野幌森林公園で行なわれる探鳥会の事を教えて頂き、さっそく、参加いたしました。

オオルリ、キビタキなどの夏鳥も観察出来るかもしれないとお聞きし、まだ見た事がない北海道ならではの鳥達に出会えるのではと、期待に胸を膨らませておりました。

5月2日、春らしい暖かい日でした。大沢口から歩き始めて、ほどなくすると、「ヤマゲラを発見！」町田市で一度だけアオゲラは見た事がありましたが、ヤマゲラは下面の横じまがなく、スッキリした印象で、体全体の緑が際立った感じがしました。この鳥は北海道にしかおらず、幸先がよいスタートとなりました。

雪が解けたばかりの森の中にはフクジュソウ、ミズバショウ、エゾノリュウキンカなどの花々が咲いていて、植物観察も兼ねながらのバードウォッチングは、楽しさも二倍で得をした気分でした。

シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラなどの小鳥達は、いたるところで顔を出してくれました。エナガは北海道ではシマエナガという亜種だと会員の方に教えて頂きました。本州のエナガには黒い過眼線がありますが、シマエナガは顔が全体に白く、体の黒と紅紫色が美しい小鳥です。初めてキバシリを見る事も出来ました。

大沢池では、本当によく探せると思われるブッシュの中に、カイツブリ、オシドリを見つけた方がいらして、ここで、少し時間を取っての観察となりました。クロツ

グミもこの場所で観察出来ました。

「毎回、アカゲラを見られるのに、今日はダメかな？」と会員の方々がおっしゃるので、残念に思っていましたら、探鳥会も終りの頃に、オオアカゲラを見る事ができ、「感激！感激！」胸にムナゲの様に黒線があるのが、特徴だそうです。なるほど、よく見るとありました。私共にとって初めて見る事が出来た鳥です。大満足の探鳥会でした。

さっそく、愛護会に入会させて頂きました。次回は今回見られなかったクマガラ、夏鳥を是非、見たいと思っています。これからも御指導よろしくお願ひします。

〒062-0052 札幌市豊平区月寒東2条18丁目1-1

クリーンリバー南月寒703

〔記録された鳥〕カイツブリ、トビ、オシドリ、マガモ、キジバト、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ニューナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 28種

〔参加者〕大西典子、沢田静明、町田幹子・理枝、山田としえ、横山加奈子、西田宰子、霜村耕介、山田美子、松原寛直・敏子、吉田慶子・マツ子、鈴木繁雄・英子、勝俣征也・由美子、稲垣敦之・嘉子、土田キミ子、石井美佐子、勝見輝夫・真知子、鎌田玲子、伊藤君野、今村三枝子、西根昭吉・紀子、村上和子、鈴木克司、香川稔、中村 稔・鎮子、村田静穂、板田孝弘、長谷川佳裕、油谷末美、菅間 恒・慧一、井川修二、小川秀子、渡辺、土田秋雄、犬飼 弘、蒲澤鉄太郎・則子、中西礼治、戸津高保・以知子、今野 弘、浪田良三、伊藤正一、後藤義民、石井 浩、船越昭則、沢田敦子、井上公雄

以上 57名

〔担当幹事〕後藤義民、浪田良三

千歳川周辺早朝探鳥会

1999. 5. 9

探鳥会報告につきましては、編集担当の不手際により、掲載できなくなりました。投稿された世永正明には、誠に申し訳なく深くお詫びいたします。

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ノスリ、コガモ、マガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、イワツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、コルリ、ルリビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、

コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 50種

〔参加者〕 遠見トモ子、渡辺好子、松原寛直・敏子、野口正男、勝俣征也、三船喜克・幸子、山田としえ、勝見輝夫・真知子、戸津高保・以知子、村田静穂、小野盛市、道場 優、栗林宏三、永島良郎・トキ江、沢部 勝、渡辺吉宗、世永正明、蒲澤鉄太郎・則子、速藤尹希子、広木朋子、板田孝弘、小川秀子、高橋利道、久田伸一、井上公雄

以上 31名

〔担当幹事〕井上公雄、永島良郎

鵜川河口探鳥会に参加して

1999. 5. 16 小山内 恵子

5月16日は、本当に良いお天気でした。鵜川には珍しく、風もなく、暖かい日差しです。

牧場での山田さんの言葉は、「日々の疲れを、自然の中で、癒して下さい。」風に吹かれ、草の中を歩き、青空の下で、私達も又、翼はなくても、今日は鳥なのです。(ニワトリかな?) 首から双眼鏡を下げた、私達が、シギやチドリに会いに行きます。

ムナグロがいました。草原の中、背中の黄色が、その時々光っています。ナカナカいい感じです。次に姿を見せてくれたのは、セイタカシギです。赤い足が長く、翼の黒い、目の上の黒が白に映えて、彼にはスターのオーラがあります。友達がつくづく語っています。「セイタカシギはジャニーズ系だよね。」フムフム、「じゃ、ムナグロは?」「演歌系?、首の太さ、脚の長さ」。そう、スパンコールの派手な上着も着ているし。3番目は、チュウシャクシギ、この鳥は最近、河口の定番です。嘴のナアント見ごたえのあることか、ゆっくり歩く彼らを見てみると、いつも幸せを感じます。

ここまでで、行程の半分、それなのに11:30は過ぎています。昼までに、河口へ着けるかな? 友達と草原を歩くと、いつもは気付かないものまで見えてきます。フデリンドウもヒメイズイも。やっと、河に着きました。対岸も、川中に出ている干潟も、なめるように見えました。ハマシギとダイゼンが、淋しく1羽づついました。

私の尊敬する鳥見人は、いつも一心に、真直ぐ鳥を見えています。普通の鳥を、何10分も見えています。何回も何回も見たシギ、チドリに「あの夏羽、きれいだよね」と感動しています。文章に知る故柳沢先生は「鳥が1羽もいなくなるまで、鵜川河口へ行き続けたい」とおっしゃる。鳥見入って、鵜川河口って、何なのでしょう?

干潟は壊滅的狀態です。鳥達が来たくても、エサ場がなくなっているのです。私はこのことを、愛護会の資料で知りました。シギ、チドリを見始めてから、まだ1年もたっていません。けれども、河口へ通いつめています。厳しい、やさしい河口の姿が、いつも、自然というものを教えてくれます。私達はこのかけがえない河口を守りたいと思っています。又、いらして下さい。いつも、本当にありがとうございます。

☎054-0032 勇弘郡鵜川町福住町3-144

〔記録された鳥〕ウミウ、アオサギ、トビ、コガモ、ムナグロ、ダイゼン、コチドリ、チュウシャクシギ、イソシギ、ハマシギ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、キジバト、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト、セイタカシギ

以上 29種

〔参加者〕村田静穂、浜田令子、竹浪はつ、松本幸也、浪田良三・典子、永島良郎・トキ江、蒲澤鉄太郎・則子、樋口孝城・陽子、三船喜克・幸子、渋谷信六・弘子、難破茂雄、板田孝弘、勝俣征也、今泉秀吉、小堀煌治、山田良造、速藤尹希子、佐藤幸典、松原寛直、富川 徹、和久雅男、犬飼 弘、荒木、原橋、井上公雄

以上 31名

〔ネイチャー研究会 in むかわの皆様方〕岩淵佐代子、門村徳男、菅原春己、樋口歌子、石岡宗子、中嶋敏子、前田和子、藤谷節子、木村裕司、木村英子、小山内恵子、中村 弘、菊地敬喜、池田恵理、山下 茂 以上 15名
〔担当幹事〕山田良造、山下 茂

植 苗

1999. 6. 6 浪田 良三

しばらくの間、勤務地の関係で、探鳥会にも参加できず、植苗を訪れるのは8年ぶりのことでした。

久しぶりの植苗はどうなっているかと思ひながら、36号線から植苗橋を渡って駅前に向う道に入ると、道路の両側の雑木林も以前とそう変わったところもなく、鳥たちへの環境が何とか保たれているようだと感じました。

当日は、風もなく絶好な探鳥日和で、先ずは道路沿いでノゴマがいるとのサインでこの探鳥会への期待がたまりました。

植苗は、定例の探鳥会のなかでも最も楽しい探鳥地だと思います。わずかの距離を歩くだけで、雑木林あり、草原(湿原)あり、そしてウトナイ湖の水辺に至るので、すから多様な野鳥に出会い、その鳥たちの住み分けが、はっきりと見られるところが何とも興味深いところです。

雑木林を抜けて草原に入ると、圧倒的なコヨシキリの囀りで、鳥たちの聖域に足を踏み入れたと感じさせられる。でも、今回はあのオオジシギの威圧的なディスプレイがなかったのも、お邪魔するものとしての遠慮が少しは軽くなりました。

草原に入っても、すぐにはシマアオジの鳴き声は聞こえない。草原の中ほどに進んでから聞こえはじめる。新聞などで、各地のシマアオジが近年見られなくなったと報じられているが、さすがにこの地では今年もその姿、声が確認できました。

草原の鳥は、森林の鳥とは異なり、誰かが発見すると、どこからも見えて、しかも、比較的長く一カ所に止っているの、見逃すことの少ないところがよい。かくして、参加した皆様ともども、ノビタキ、オオジュリン、ベニマシコなど、次々と自分の目で見る事ができて、満足できる探鳥会でした。そのような訳で、周りの鳥の動きをあまり気にせず、大空のもと、ゆっくりと昼食をとることができたという声も聞かれました。

帰ってから「野鳥だより」をさかのぼって調べて見ると、植苗で探鳥会を始めたのは昭和53年からのようで、今年が22回目となります。その毎回の「探鳥会ほうこく」に記録された鳥の種類を集計してみると、87種類になりました。6月の初旬から中旬という限られた期間のことですから、この時期の植苗は、魅力ある探鳥地だとあらためて思いました。

当日は、十分に野鳥の生きるさまをみたとはいえないものの、あのにぎやかなコヨシキリの姿も後回しとなり十分に見なかったし、常連のはずのエゾセンニュウやマキノセンニュウの声も聞き逃し、ツツドリの声も聞かなかったので、数日後、同じ様な天候に日に、再びこの野鳥の聖域を訪ねて聞き落とし見落としを補ってきました。

この野鳥たちの環境が、いつまでも保たれることを願って止みません。

☎069-0842 江別市大麻沢町10-14

〔記録された鳥〕ダイサギ、アオサギ、トビ、ハイタカ、コブハクチョウ、マガモ、オオジシギ、キジバト、アオバト、ツツドリ、カッコウ、コゲラ、ヒバリ、ツバメ、ノゴマ、ノビタキ、ヤブサメ、ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、キビタキ、コヨシキリ、センダイムシクイ、ハシブトガラ、シジウカラ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス 以上 37種

〔参加者〕赤澤正一、茂田井加代子、飯山五玖子、三船喜克、幸子、戸津高保、以知子、樋口孝城、陽子、浪田良三、典子、武沢和義、佐知子、雪田昭治、久子、蒲澤鉄太郎、則子、松原寛直、高橋利道、今泉秀吉、小堀煌

治、山田良造、難破茂雄、村田静穂、犬飼 弘、板田孝弘、吉田 功・美香、山下和子、鷺田善幸、西山礼子、浦田 博、北山政人、勝見輝夫、内田 孝、竹内 強、香川 稔、井上公雄 以上 38名
〔担当幹事〕竹内 強、樋口孝城

東米里探鳥会

1999. 6. 13 中西 哲 男

『白石村誌』によると、開村のころは、至る処、うっそうとした森林があり、その間に草原があった。豊平川の兩岸では、さまざまな高山植物が採取された所であったと記されている。鳥類も127種程度記録されている。白石の何処でも四季それぞれ色々な鳥が生息していた。今では米里地区の草原に住む鳥しか観察できなくなった。今回の観察では、25種類の野鳥が確認できたが、鳴き声で確認されても、直接みられる鳥の数は少なくなってきている。

水辺と繁みを残し鳥や昆虫の生息できる場所を確保できないものかと、地元の人達が活動を始めたしている。追伸

現在、環境保全を計画している場所は、豊平川の下流、豊水大橋（札幌自動車道・札幌新道）の付近は月寒川・望月寒川が合流する地点から豊平川の注ぐ間、豊平川が増水すると、その川水が逆流するので「逆川」と呼ばれている所で、現在は水門とコンクリート管が敷設されているが、1kmほど現存している。この一帯をホテルと赤トンボが生息できる地帯として利用できないかと地域の住民が中心になって活動をしている。

☎003-0022 札幌市白石区南郷通8丁目南5-1-302

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、マガモ、コチドリ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 25種

〔参加者〕樋口孝城、陽子、村上和子、高橋利道、山田良造、勝見輝夫、真知子、雪田昭治、久子、板田孝弘、山田甚一、玲子、戸津高保、松原寛直、敏子、犬飼 弘、中西哲男、美枝子、佐々木潤子、三船喜克、高辻 弘、赤澤正一 以上 22名

〔担当幹事〕戸津高保、樋口孝城

「夜の探鳥会」に参加して

1999. 6. 19 原 龍 三

定刻の時間より早く集合場所に到着。車から降りると

鳥の鳴き声がある。アー、ツツドリの声だ!!ツツドリが鳴いている。カラスも一緒になって。滝の音と一緒に早々と出迎の挨拶を受ける。今日の探鳥会は幸先がいいぞ!!と思いながら滝の周りを探索(平和の滝を見るのは始めなんです)しながら集合時間を待つ。定刻になり全員集合。「まだ、日は明るけれど鉄塔の下まで(30~40分)山道を歩けば暗くなるでしょう」と云う幹事さんの話しを聞きながら全員目的地へと向う。歩き始めると直ぐに鳥の鳴き声があるが、私には直ぐには何も聞こえない(難聴気味)、でも良く耳を澄ますとかすかに聞こえてくる。「キビタキ」の鳴き声のようだ?続けて「アカハラ」「ヤブサメ」とCDで聞きなれた声が聞こえる。こんな事を繰り返しながら目的地に到着。意外な感じがした。うっそうと繁った深い暗い森を想像したのに、とても明るい森も林もない鉄塔の下とは。まだまだ明るい、皆んなそれぞれ思い思いに藪蚊を追って「ブッポーソウ」の鳴くのを待つ。午後8時、星も月も光が鮮明になってきた。まだ「ブッポーソウ」と鳴かない。しばらくすると、かすかに手稲山山頂の下の方で「プー」とか、「ソー」とかコノハズク独特な高い声が聞こえるようだ。もっとはっきり聞こえる所まで来ないかなと……皆んな思っていると思う。残念ながら今日はここまで!!コノハズク探鳥会終了。

暗い坂道を懐中電燈の小さい光を便りに帰途につく。途中、トラツグミ、ヤブサメ等の鳴き声を聞いても何となく空しい気がする。しかし、今日の探鳥会、13種の鳥の鳴き声を聞くことができた。年々数が減少する中、所期の目的は達成されたと思う。

今、札幌近郊には年間何種類の野鳥(渡り鳥含めて)がいるのだろうか?四季折々の野鳥の声を聞きたいものです。最後に、幹事さん今日の探鳥会ご苦労さまでした。
☎069-0864 江別市大麻泉町10-9

〔記録された鳥〕ハイタカ、キジバト、ツツドリ、コノハズク、ヒヨドリ、マミジロ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、キビタキ、アオジ

以上 13種

〔参加者〕谷口一芳、山田美子、赤澤正一、鬼頭研二、武沢和義・佐知子、原 龍三・イチ子、宮永まさ子、田子元樹、古海幸代、佐々木綾子、中正憲信・弘子、戸津高保・以知子、吉田百合子、樋口孝城、佐々木裕、砂川成輝、清水朋子、宮森達夫、井上公雄 以上 23名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

福移 探鳥会に参加して

1999. 7. 4 岩崎孝樹

昨年かでの2・7で北海道ウォッチングガイドを見て、

7月に自宅(あいの里)近くで探鳥会(福移)があることを知り初参加して以来、今年の6月27日野幌森林公園につづき今回が3回目の探鳥会参加です。自宅近辺には自然が多く残っているので、早朝の犬の散歩の時もたくさん鳥の声や姿を見かけますが初心者の方、鳥の名前がわからずもっと知りたくて参加致しました。

福移入口バス停より牧草地、堤防、河川敷への途中道場さん、栗林さんのリーダーをはじめ各ベテランの方に教わりながら野鳥観察を行いました。

鳴き声ですぐ鳥の名前がわかったり、飛んでいる姿で、すぐ識別したり、鳥の居る場所を素早く見つけて望遠鏡をセットしてくれたり、すばらしい鳥の世界を見せていただき大変感激、感謝致しております。

草原の鳥(カワラヒワ、ウズラ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ヒバリなど)のすばらしい鳴き声、ショウドウツバメの空中食餌、オオジシギ(幼鳥?)のランデブー飛行、チュウビの悠々とした飛行、カッコウののどかな鳴き声、ノビタキ、カワラヒワ、ホオアカ、オオジュリン、ムクドリ、ベニマシコ、アカハラ、アオサギなど数多くの野鳥を観察でき、身近に感じてだんだんきつて来られました。

私はイルムケツの麓で生まれ自然にかこまれ育ったため野鳥の声や姿をみるとなつかしさと親しみがわいてきます。

開発が進み自然が段々少なくなってきている今、いつまでもすばらしい鳥を見たり聞いたりしたいものだと思います。

今後も継続して参加しアドバイスを受けながら腕(目、耳?)を磨いてすばやく鳥の世界にはばたけるようにと願っております。

☎002-8071 札幌市北区あいの里1条7丁目12-7

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、チュウビ、ハイタカ、マガモ、ウズラ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 31種

〔参加者〕吉田 功・美子、武沢和義・佐知子、横山加奈子、内川雄平、高橋利道、内田 孝、橋爪陽子、戸津高保・以知子、三船喜克・幸子、中正憲信・弘子、北山政人、難破茂雄、犬飼 弘、清水朋子、信田洋子、松原寛直・敏子、蒲澤鉄太郎・則子、速藤尹希子、板田孝弘、山田良造、後藤義民、吉田慶子、岩崎孝博、赤澤正一、渡辺 寛、白澤昌彦、小堀煌治、広木朋子、樋口孝城、

道場 優・信子、栗林宏三、香川 稔、井上公雄
以上 41名
〔担当幹事〕道場 優、栗林宏三



【宮島沼】 平成11年10月10日(日)
ユーラシア大陸東北部、カムチャツカ半島などでひと夏を過ごしたマガンは、新しい家族を伴い更に南の越冬地へ向かう途中この宮島沼で休みます。秋の滞在は短く次々と南へ向かいます。春ほどの大群

にはなりませんけれども大きな群れで行動します。マガンばかりでなくハクチョウやカモ類各種カイツブリも混じり色々な種類を探し楽しみもあります。昨年はツルシギが観察されるなどシギ・チドリに出会えることもあります。

集 合＝午前10時 大富会館前
交 通＝JR岩見沢駅前バスターミナル発
中央バス月形行、大富農協前下車
徒歩約15分

【野幌森林公園】 平成11年10月17日(日)

朝夕の冷え込みが樹々の葉を多彩に染め秋の深まりを感じる季節です。カラ類が混群をつくり盛んに森の中を移動して回り、早くもシベリア方面から渡ってきたツグミやキレンジャク・ヒレンジャク、カシラダカなどが姿を見せはじめます。この森の常連であったキジバト、メジロ、アオジ、カワラヒワなどの夏鳥もそろそろ見られなくなります。秋の自然の彩りの美しさとカツラ、ホオノキの落葉のほのかな香り、夏の営みを終えようとする樹々の彩りと、秋の森の匂いに覆われた中での、探鳥の一日を楽しみたいものです。

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時
交 通＝夕鉄バス 新札幌駅バスターミナル発
「文京台西行き」大沢口公園下車
徒歩約5分

【ウトナイ湖】 平成11年11月14日(日)

今年生まれた幼鳥にとっては初めての長旅です。家族の絆の強いハクチョウはファミリーで、カモ類は同じ仲間同志がグループになり南の越冬地へ向かう前のひとときです。一部の越冬組？を残しアオサギの殆どは温暖な南へ、この時期でも過去にはコウノトリ、ハクガン、アネハヅルなどの珍鳥の記録もあります。主に観察される

鳥はオオハクチョウ、コブハクチョウ、ヒドリガモ、ヨシガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、オジロワシなど25種前後が観察記録されます。

寒い時期ですので温かくして参加しましょう。
集 合＝9時40分 ウトナイ湖畔駐車場湖畔側
交 通＝新千歳空港発 道南バス苫小牧行き
ウトナイレイクランド下車

【野幌森林公園】 平成11年12月5日(日)

12月としては初めての定例探鳥会になります。年によっては根雪になる時期でもあります。赤い冬鳥として関心の高いイスカ、ギンザンマシコ、稀少なオオマシコなどが現れるのもこの時期からで、キレンジャク・ヒレンジャク、ツグミ、シメ、ウソに留鳥のカラ類、キツキ類などと地道なウォッチングになります。寒さの中での鳥との出会いは、夏と異なった楽しさと趣があります。

集 合＝午前9時 大沢口駐車場入口

【野幌森林公園を歩きましょう】

平成11年10月3日(日) 11月7日(日)

☆交通機関を利用をされる方は各自でお調べ下さい。
☆昼食、雨具、観察用具、筆記具などをご持参下さい。
☆いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。
☆探鳥会の問い合わせは011-866-1525 井上宅まで

鳥民だより

愛護会の名入りカレンダーの販売について

平成12年(2000年)版カレンダー 100部

頒 価 1,000円

申し込み、問い合わせ先着順で販売します。

小堀：(011)591-2836 戸津：(011)831-8636

会 員 名 簿

【新会員のご紹介】

(敬称略)

西山 礼子	札幌市東区北37条東29丁目2-16
野田 紘幸	札幌市清田区里塚緑ヶ丘9丁目 9-3
信田 洋子	札幌市南区北ノ沢8丁目11-5
鈴木 実	函館市中道2-5-5
岩崎 孝博	札幌市北区あいの里1-7-12-7
越智 仁司	中川郡幕別町札内新北町4-1

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

☎060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465